

人と業績

ドクトル 渡辺海旭

——真に学を愛した「現代的佛者」——

桜 部 建

一

壺月渡辺海旭先生が昭和八年一月、東京深川の自坊に示寂された時、愛知県の片田舎の小学一年生に過ぎなかった私に、先生の「人と業績」を語る資格はもとより無い。ただ遺された『壺月全集』二卷によって、遙かにその風手を偲び、その学と徳とを仰慕するに留まる。

しかし、世に遺稿集・遺文集の類は多いが、凡そ『壺月全集』ほど故人の全貌を遺憾なく示すものは少いのではないだろうか。その内容は、著述・研究論叢・講説論策・警世時言・感懷隨筆から詩藻文範・牘箋消息までに亘る（さらに略伝・逸話・年譜・諸家の哀悼文なども附せられている）。欧文の述作を除けば、海旭師のものせられた文章の殆どがここに網羅されているといっても、おそらく過言でない。これ程までにこまやかに遺芳が蒐録されたところにも、同学・後輩らに深くその徳を慕われた故師の人柄が窺われる。そして、そのようなゆきとどいた蒐録であればこそ、三十余年を隔てた今も、それを繙いて、親しく師の聲咳に接する思いがするし、また、もっぱらそれに拠って師の「人

と業績」を語るとしても、師の高風を甚だしく誤り伝えることにはならないであろうと思うのである。

ただ、『全集』に魯魚の誤りがありにも多いのは、少々遺憾としなければならぬ。壺月先生御往生の後わずか一年ならぬ間に上下二巻千四百頁に余る巨冊が編輯され刊行されたことは驚きとするに足るが、やや功を急ぐに過ぎて、校正などに粗漏の点があったと見られるのは残念である。

二

渡辺海旭師が二十四歳で浄土宗学本校全科の業を卒えたのは明治二十八年。宗学本校七年の課程を通じての同級生として雁行して進んだ俊才に望月信亨・荻原雲来両師があり、別途（一高から東大）を歩んだ同宗の秀才に椎尾弁匡師があった。望月・荻原師は共に渡辺師より三歳年長、椎尾師は四歳年下である。

本校卒業より渡欧までの五年ほどの間に、海旭師が発表した論文は七篇あり、その三篇はチベット佛教に関するもの、四篇はバラモン教・インド教およびそれらと佛教との関係交渉に関するものである。また別に、「奮って聖典原文の研究に従事せよ」と題する一文がある。それらによって、師の研究の目指す方向、師が後年においてその学的活動を展開した領域が、すではっきりと示されているといつてよい。

師が早くもこの年代において、チベット佛教に対して強い関心を示した背景には、たしかに、日清戦役を契機として、わが少壮佛教学徒の間にまき起こった、一種のチベット旋風があったと思われる。河口慧海が入蔵を意図して海を渡り、まずインドに入ったのは明治三十年、ラサに到ったのは三十二年である。能海寛・寺本婉雅らは三十一年シナ大陸の側から入蔵を企図し、翌年能海は中道にして四川の奥地に斃れた（海旭は能海を「友人」と呼んでいる）。東温譲・川上貞信らがチベットを目指したのもこの頃である。まことに当時の日本には「鏘々たる鉄腸を雪蔵の皚々たるに振ひて拉薩の宝殿に秘経を探らんと欲するの壮漢、前後相次ぎて起」った（「拉摩教の分派及其発達」明三二、佛教一

五二号。すでに「甘単両殊の大蔵」も「初めて吾国に入」っていたのである。

しかし海旭師のチベット佛教への注目は、ただ単に時代のチベット熱に浮かされたためではなかったであろう。早くも視線を遠く世界の学界に馳せていた師であるから、チョー・マ・シュミット以来積み重ねられたヨーロッパのチベット学の業績に、強くその攻学の念をかき立てられていたに違いない。宗学本校在学中に発表した「西藏佛教一斑」はおもに E. Schlagintweit: Buddhism in Tibet, Leipzig, 1863 に拠ったものであるが、その中にはチョー・マ・シュミット・ホジソン・ターナー・ウィルソン・ワシリエフなどの名も挙げられており、二年後に書かれた「西藏佛教の二大本尊」にはさらに、ロックヒル (The Life of the Buddha, 1884)・ライト (History of Nepal, 1877) について言及がなされている (まだシーフナー・フーコーらには説き及んでいないが)。

インド教・インド哲学に関する論策にしても、奮って原典研究に従えという提言にしても、一読して気付かしめられるのは、なお白面の一書生であった筆者が、当時の事情からすれば驚くべきほど博く、西欧学匠の業績に目を曝していたことである。後年名著『欧米の佛教』の著者たるの片鱗はすでにここに示されている。もっともヨーロッパの学界の情報に今日ほど十分には恵まれなかったその頃のこととして、多少つじつまの合わないことも生じたのは止むを得ない。たとえば、まず荻原師が着手して、未完のままドイツへ赴いた (明治三十二年) あとを、渡辺師ほか一二の人が協力して完成し、雑誌「佛教」に発表したマハーヴァンサの和訳がある。この原本は一八三三年ウツパムによって出された杜撰な英訳 (シンハリーズ語よりの重訳) であるが、その刊行のわずか四年のちに、ターナーによる直接バーリ語原文からの完璧な訳が出たため、もはや全く顧られなくなっていたものである。雑誌「佛教」に載った和訳は、ターナーの名訳の出た六十年も後に、わざわざ先の不備の多い重訳からさらに重訳を試みた結果になった。

渡辺師の滞欧研鑽は明治三十三年から四十三年まで（一九〇〇—一九一〇年）満十年に近い。南条（明治九一—一七年）・笠原をわが国佛教学界よりの渡欧留学（南条先生みづから言う所の「西征」）の第一陣とすれば、第二陣の藤島（了穩、一五—二三年）・常盤井（堯猷、一九—三二年？）・高楠（二三—三〇年）に次いで、第三陣として荻原（三二—三八年）・姉崎（三二年—？）の諸博士と相並ぶ。近角常観・蘭田宗恵師らも亦（滞留期間は余程短かったが）時を同じくして彼地に在った。

その頃ヨーロッパのインド学界は、元老マクス・ミュラー博士を喪った（渡辺師の渡欧直後七十七歳で逝去）が、L・フェール、H・ケルン、T・W・リスデヴィズらの老大家は健在であり、H・オルデンベルク、S・レヴィ、R・ガルベ、E・シャヴァンヌ、K・E・ノイマンらが中心となって活動し、L・ド・ラ・ヴァレ・プサン、M・ワレザー、Jh・シチェルバッコイらの新鋭が進出するなど、幾多の碩学俊秀が蘭菊の美を競っていた。独有雲来師に半歳遅れて壺月海旭師が同じくその膝下に笈を解いたライン河畔ストラスブルク（壺月流の表現でいえば萊江畔蘇杜拉城）のE・ロイマン博士も、その中であつてなお四十歳代（海旭師はしばしば「ロイマン翁」と呼んでいるが）の中堅学者であつた。

こうした中で海旭先生の欧州三界を股にかけた縦横の活動が始まる。『壺月全集』に付せられた「伝記」（筆者不詳）は次のようにそれを叙述する。

独逸に入るや、ストラスブルク大学に入学し、斯学のオーソリチー、教授ロイマン博士に師事し、まづ梵藏巴の佛教各語を研究、これを基礎に比較宗教学の研鑽に年を重ね、さらにグラント教授に就きて精討を尽し、受講攻究通計十二年（？ 実足は足かけ十一年）の長きに及べり。これを分類すれば、前六年は多く象牙の塔に籠り専心自己の研

究に没頭し、後六年は漸く対外的活動にも進出しカイザーウィルヘルム二世大学を始め各大学及び伝道学校等の招聘に応じて、佛教哲学、印度学の教壇に立ち、外国人に対し東洋文化普及の先驅を為せり。またハンブルクに於ける東洋学会、瑞西バーセルに開かれたる世界宗教大会等に出席、多年の蘊蓄を敷衍し其学殖を認められ、或は：(JPTS・JRAS・佛教・東洋哲学・新佛教・浄土教報などの諸雑誌に) 随時貴重な研究論策を発表し(欧文八篇和文二十六篇を数える)……特に密教發達論、孔雀王經、毘沙門天王經、跋足王等の研究の如き……専門学究の徒をして駭目せしめたり。或いはヘルンレ教授の東洋古文書の解釈(R. Hoernle: Manuscript Remains of the Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan, Oxford, 1916)に力を貸し、或はワレザー教授の中論独訳(M. Walleser: Die Mittlere Lehre des Nagarjuna, Heidelberg, 1912)に其漢訳を担当解説せり。また原典の研究としては普賢行願讚諸本の比較研究あり、独逸訳を付して刊行(刊行は師の帰朝後ライプツィヒのハラソーウィッツから)され、この論文により明治四十年十月、三十六歳の秋、ドクトル・フィロゾフィーの学位を獲得するに至れり。ストラスブルクにおける学究的日常は、彼地より姉崎博士や島地大等氏に向けて書送られた書簡の上によく窺われる(『全集』下巻五七〇頁以下)。

このような研鑽の日々を送る一方「暇ある時は欧州各地を巡遊し、基督教徒布教の實際を調査し、宗教的視察を怠らざりき」とは、ストラスブルクに五年間の起居を共にした荻原博士の追憶である。そしてまた、海旭師みずからは「一時は近世の『ロマンチズム』に酔ふてワグネルに熱中しグリルバルツェルを嗜むだこともあつた。一時は教界の實際問題に狂気になつて、基督教牧師の家に屢宿泊したこともあつた。或は露国革命党の健児等と親み、社会党の田舎政客と友達になつて、独逸当時の親露政策に、螳臂を揮ふて役にも立たぬ正義と人道を呼号したこともあつた。或は自由思想家の群に投じて、彼等が基督教に対する不平不満怨恨の大なるに乗じて、窃に佛教の伝道に腐心したこともあつた」と、その霸氣満々、ほとんど端倪すべからざる滞独生活の一面を語っている。

三十九歳の春、帰朝すると直ちに宗教大学（現大正大学の前身）・東洋大学の教授に聘せられ、また、浄土教報の主筆に迎えられた。このポストは先に師が宗学本校卒業の直後、弱冠二十四歳にして就任し、颯爽たる筆陣を張ったところであるが、滞欧研精の十年を隔てて、再びその席に復することになったのである。翌明治四十四年五月には佛教者の社会事業の嚆矢として名高い「浄土宗労働共済会」を深川に設立する。八月には芝中学校の校長に就任して、爾来終生その職にあった。

以後、学界・教界・教育界・国際事業・社会事業など、各方面にわたる師の絢爛たる活動は全く佛教界に比類を見ない。宗門にあっては浄土宗布教団長・増上寺教監などを勤め、のちには（大正二五―昭和七年）浄土宗執綱として宗務を統理した。中央佛教会・佛教連合会・佛教音楽協会・東京佛教俱樂部等々、およそ佛教各宗の連合機関にして師が理事などとして名を列ねなかったものは無いと云える程で、高島米峰氏によれば海旭師は「日本佛教界における安全弁」であった。学界にあっては大正十一年高楠博士と共に大正新脩大藏經の刊行という至難の事業を発願し、「都監」として事業の全般を指揮して、ついに昭和七年正統八十五卷の刊行を果遂したし、昭和四年には森川智徳氏と謀って広く学徒を糾合し日本佛教教学協会（現日本佛教学会の前身）を結成した。大正大学・東洋大学・大阪上宮中学・東京小石川淑徳女学校その他多く学校の理事長・評議員などとしては、経営の枢機に参画し、その隆盛に力を竭した。社会事業の推進役としての活動は、中央社会事業協会役員・借地借家調停委員・禁酒同盟理事などから交通道德会の理事にまで及ぶ。また、大アジア主義を提唱しインド・中国・チベット・ビルマなどから亡命志士の来り投ずる者を迎えたり、諸国よりの留学生・研究者に対する斡旋や指導の懇切がおのづから多くの頼り来る者を集めたりして、師の住房西光寺は「世界的梁山伯」と称された。

このような多彩な活動から、人は師を「八面六臂の人」（常盤大定）と評し、「学者よりも寧ろ教育家、教育家よりも寧ろ世相改善家」（徳富蘇峯）と評し、あるいは「学者であり、詩人であり、信心の人であると共に事業の人である」（姉崎正治）と評する。師の盟友荻原博士すら「学的方面は未だ君が本領を発揮せるものに非ず」「君が本領は実に教界に於ける活動にあり」といつている。にもかかわらず私はやはり、小野玄妙博士と共に「先生は決して所謂宗政とか事業とかいふやうな方面の人でなくして徹頭徹尾学窓の人であつた」と考えたいと思う。師の多情多感と、明敏の頭脳に相伴うすぐれた行動力とは、ついに師をしてただ古書堆裡に安坐する如き生活を享受せしめなかつたけれども、師はやはり本然の学者であつたし、すくなくとも真に学を愛する人であつた。

師が浄土宗の執綱を辞したわずか二週間のち、師は早くも在洛の一インド学者に書を送つて、二冊の専門書の貸与を乞うているが、その文面には「俗務の牢獄より解放」されて再び読書のたのしみに近づき得る喜びがそこはかとなく漂っている。大正十四年、まだ三十歳にも満たぬ無名の一学徒が、書面をもつて師に学問上の質疑を呈したのに対し、師は懇切な返書を送つてそれに答えているが、その末尾に書添えて、

拙生嘗て金光明〔經〕印度板の杜撰粗糲糺甚しきを患へ、……〔諸本を対校して〕……大体校訂を終り、或時機公刊の腹案なりしも、材料校本とも十年の苦心を劫火（関東大震災）に委し候。諸行無常何の恨む所も無之、資料の蒐集、対校の劳苦他日を期すべき望なきにあらざるも、貴答に際し、稍閑煩惱の不覚湧起するを免れず候。凡情可笑亦可憫の至に候

といい、さらに

乍末筆筆硯益御清祥、御考究愈精美、衷心祝禱申候。拙生震災後殆ど学業を廃し、奔波放浪の生活深慚深愧の至に候

と述べている。右のいう震災による焼亡については別に「九月一日震災後作」という七絶一篇があつて、曰く

江東の災火熾^やきて遺す無し

幾万妻を喪い亦兒を哭す

説くを止めよ寒僧に此の苦亡^なしと 焼書卷卷妻兒の如し

学を愛せず書を愛せぬ人にどうしてこれらの切々の辞があり得ようか。

『欧米の佛教』（大正二年佛教講義録の一として出され、大正七年あらためて丙午出版社より刊行）が師の博覧と達識の産物として、比類の無い古典的名著であることは言を俟たぬ。師の和文をもつてものせられた著作としてはそれが唯一、最後のものであるが、その事をもつて師が晩年学に遠ざかったと見るは当らない。小野博士は説く。「先生の纏つた書物として発表されたのは『欧米の佛教』丈である。……その後、最近に余り研究論文を発表されてゐない。然し先生が所謂書齋人として一日も研究を捨てられぬ証拠は震災後忽ち震災で亡くされたものを再度御買集めになつたことでも分る。他の人々是如何に見らるゝか知らぬが先生を学問以外のみに見られるが、然し私のお会ひした先生はいつも書齋人として蔵経や原典やらを見てゐられたことは、最近も二十年前も少しも変らない。」

五

師を徳の人として推す声も亦はなはだ高い。その純真玲瓏な人格、磊落豪放でありながら同情深く友誼濃かな人柄は内外の多数の人々の尊敬と信頼をかち得た。『全集』に見える諸家の哀悼文は、一篇の例外もなく、それぞれにこういう師の高風を讃えている。

萩原博士は特に筆を費している。「君が一生を通じて最も顕著なる美德は功を他に譲ると云うことにあり。隠密に立案し、交渉し、助言し、画策し、指揮し、敢て自ら表面に出でず、而して成功の暁には自ら関与せざる者の如くす。是れ実に君が性格の最も偉大なる所とす。故に不言の間に君に信服せる者甚だ多し。これ全く菩薩の大作と言うべし。」おそらくは師にとって知己の言であらう。師自ら記された中にも「人、僕を嘲りて曰く、徒らに人の為に犬馬

となりて滋味は他の喫する所となる、天下の至愚なり、と」という一節がある。

まことに師は自らの功を語るに謙抑で他の功を揚げるに熱心であった。師の文藻の流麗は名高いが、ことにそれが他の功績を讀えたり後学を推輓したりする文章になると一段と生氣を帯びて来る。「独有荻原雲来氏の帰郷を送る」

「博士となれる椎尾弁匡氏」「矢吹氏の帰朝を迎ふ」「荻原教授還曆記念祝賀論文集序」などはその好例である。

『欧米の仏教』も亦一面からすれば全篇これ他者の学績を讚美した書物であるといえよう。一方、師自身の還曆に當って知友門弟の間に祝賀の企てがなされた時は、ただちにそれを謝絶して、企ての中心となった人々に長文の書面を送って計画を思い止まるよう慫慂しているが、その情理を尽した名文も亦、師の高風を示すに足る。

その文中に「僧門に賀寿の法無之、仮令破戒汗行言ふに足らざるも尚且僧門たるの真骨頂丈は飽くまでも保持致し度」の句がある。この「僧には僧の意気がある」という気概も、師の人格を語るに逸し得ない点であろう。師が独身清潔の生涯を送ったことは甚だ著名であるが、もとこの気概より出づるものと拝察する。みずから、平素師と仰ぐ所として慈雲・普寂・貞極の三大徳を挙げている点にもその僧儀を重んずる心事をうかがうことができる。同じ心事から師はバリー文増支部後半の校訂者ハーデーの生涯を欣慕して「僕が一生故エドモンド・ハーデーの如くなるべく、極めて進歩せる思想と忠実真摯の研究態度を取り、而も忠実なる加特力教の一僧として淨戒を守り、寂然として書齋に円寂した彼は僕が最近の模範なり」といい、「旧教の頑固よりは異端として忌まれ、官学の連中よりは旧教僧として斥けらる。然も自由なる講究と清肅なる戒律とは終生渝らず。悠々として円寂に入りしもの何の高潔ぞや。佛僧幾万、彼が如き好漢幾人かある」と嘆じている。

蘇峯はそのような師を「現代的佛者」として「行誡上人以後の一人」と讃えた。詩人晚翠はまたそれを「渡辺海旭上人弔歌」に詠じていう――

思は深し 深川の

浄刹、君の 西光寺

都門の塵は 深くとも

妙境別に 風清く

月も澄みけむ 西光寺

室に脂粉の 香を絶ちて

夜半の窓に 襟正し

梵文貝葉 秘を開き

幽を探りて 学海の

底に求めし 玉光る